

# 自閉症スペクトラム障害の子どもと母親の関係性の変容

## —RDI を適用した一事例の検討—

Modification process of relationship between mother and child with ASD

—A case study on the effect of RDI—

高橋 ゆう子

大妻女子大学家政学部

Yuko Takahashi

Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード： 自閉症スペクトラム, 対人関係発達指導法, 導かれた参加, 関係性

Key words : ASD, Relationship Development Intervention, Guided participation, Relatedness

### 抄録

本論の目的は、RDI（対人関係発達指導法）に取り組んだ親子の相互行為の変化に影響する行動特徴を明らかにすること、子どもの社会性につながる親子関係の支援と養育支援について、一家族の事例から検討することである。対象は、6歳のASD児とその母親で、約2年間RDIに取り組み、その間、アセスメント（RDA）として親子のやりとりを3回撮影した。その映像を、関係性を捉える3つの状態（共同注意、相互調整、間主観性）から評価を行った(Larkin, et al, 2010)。そして行動コーディングシステムを用いて視線、非言語、感情、言語など親子の行動、32カテゴリーについてコーディングを行った。2つの行動が同時に生じた回数（同時生起性）、また続いた回数（事象連鎖）を算出して分析を行った。結果は次の通りである。まず、3回のRDAでは共同注意、相互調整、間主観性のいずれにも変化がみられた。次に行動のカテゴリーについてみると、親子の視線、非言語に分類される行動が増えた。また、それらの行動間の同時生起性や行動のつながり（事象連鎖）の算出は、親子の相互行為の変化を検討できる指標となることがわかった。以上から、RDIが親子の関係性の変容に影響することが推測された。そして、関係性に焦点をあてた育て直しの重要性和関係性を捉えることの難しさ、支援のあり方について考察を行った。

## 1. 問題と目的

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）の特徴として、社会性の育ちの難しさが挙げられるが、支援にあたっては、社会性をどう捉えるかによって大きく支援のあり方が変わってくる。具体的には、一つの能力と捉えて社会性を支える能力に焦点を当てるか、あるいは関係の中で育まれるものとして関係性に焦点を当てるか、この違いは大きいといえる。前者の場合、個体としての能力の獲得に伴う評価は主に行動で行われるので、行動論的アプローチによる支援が有効とされる。一方、後者では養育者との安定した情緒的關係、間主観性の成立が重視されるので、関係発達論的アプロ

ーチが活用されることになる。

Trevarthen (1997)<sup>[1]</sup>は、自閉症は、他者と態度、経験、目的を共有して教わり、学ぶための正常な動機が働かなくなってしまうと特徴づけ、協調や交渉、文化的に適切な学習が生じるようにできる限り組織的に促すような介入が必要だとする。そして自閉症児のためのどのような教育的、療法的な方策も、子どもと家庭ベースでなければならぬとし、親と子どもとの意思疎通関係が改善されることの重要性を強調した。滝川 (2017)<sup>[2]</sup>は、ASDの子どもは「ひと」との直接的な相互交流（二人三脚）を介してものごとを学びとる力は弱い、交流への志向性は平均よりずっと弱いだけ

でちゃんともっているし、おとなへの興味や接近のサインを（かすかだが）示すので、乳児期から「二人三脚」での探索活動に向かえるような療育的支援がなされることが望ましいとする。そして支援のポイントは、スキルを公式的・機械的に教え込むのではなく、理解や判断を人と交換し、分かち合う体験を繰り返し積み重ねるところであると指摘する。

現在、ASDの社会性の発達支援としては、前者の行動論的アプローチが適用されることが多いが、その理由として、子どもの認知や社会的スキルを伸ばすなど支援する具体的な内容が、スモールステップで進められるので支援する側にとってもわかりやすいこと、行動形成とともに能力が獲得されたことが短期間で測定しやすいことが考えられる。一方、関係発達論的アプローチの場合、関係性の変容を捉えることが容易ではなく、また親子関係の安定が子どもの社会性の発達につながるという理解が十分でないこと、関係性に注目することの意味や効果が見だしにくいことも考えられる。さらに親子の安定した情緒的關係は、日常生活の中で少しずつ時間をかけて育まれ、それが子どもの社会性の育ちの基礎となるので、効率性や即効性という概念はそぐわない。黒川(2016)<sup>[3]</sup>は行動面、実践上の有効性だけに注目することは、社会的な一般的な人間関係における実利的な考え方に、親子や家族を当てはめることになり、親子の関係を損ねてしまう可能性があることと指摘する。Fogel(2008)<sup>[4]</sup>も、援助者から教示されたことをやった方が早く効果的な結果を出せるかもしれないが、養育者である親が日常生活の何気ないやりとりの中で、感じたことを元にながら子どもと関わった方が、子どもと相互的な創造性を発揮する機会(opportunity of mutual creativity)ができ、親の自発性や自信につながることを強調した。

RDIは後者の関係発達論的アプローチの一つで、(Relationship Development Intervention; 対人関係発達指導法と訳されているがセラピーではないとされる、以下RDI)は、ASDの子どもとその家族を対象とした治療的教育方法で、社会文化的視点に立った“導かれた参加”(Rogoff, 1990)<sup>[5]</sup>という考え方を重視する。Rogoff(2003)<sup>[6]</sup>は、「人は文化の活動に参加しかかわりながら発達する」と社会文化的活動への参加の変容として発

達を捉え、導かれた参加の基本過程として、相互に行為や反応を参照しあったりしながら、互いの意味を橋渡しする非言語的コミュニケーションのプロセスを重視する。発達援助における社会文化的視点の重要性については多くの指摘があるが(田嶋, 2009<sup>[7]</sup>・須田, 1999<sup>[8]</sup>・氏家, 2012<sup>[9]</sup>)、このように周囲との関係性に焦点を当てたアプローチは、問題行動の改善や適切な行動の獲得という結果ではなく、定型発達児と養育者の伝えあい、調整しあう、親子の関係発達のプロセスに目を向けることになる。ASD児の場合、養育者との間で“導かれた参加”の關係(Guided Participation Relationship; 以下GPR)が、構築されにくく、養育にあたる親も子どもと情緒的交流ができていない感じが得られにくいいため、親も不安定になりやすい。ASDの養育者の場合、子どもの社会性に不安を感じると、失敗しないように先回りするような形での指示や修正が多くなることが考えられる。結果的に、子どもは親と情動交流する機会、さらに自ら感じたり考えたりしながら判断して動く機会が奪われてしまうわけだが、それを子どもの能力として原因を帰属してしまうと、その能力を身につけるための課題抽出や遂行に重点が置かれてしまい、子どもの自発性や社会性は促されない。したがって、親が専門家ようになって子どもの課題遂行を促して評価するのではなく、親として子どもと安定した情緒的關係の築き直しを図ることがまず重要であり、日常生活の中で養育者が師匠、子どもが見習いとなるようなやりとりに重きを置いて、ガイドとなって養育者が子どもを導く力をつけることが肝要となる。このようにRDIは、親との間でのGPRを構築することをめざして育て直しを行い、全体的な家族の養育機能の回復をねらっていく(Gutstein, 2009)<sup>[10]</sup>。

GPRのプロセスを鈴木(2016)<sup>[11]</sup>は次のようにわかりやすく説明している。「最初はまだ生産的な仕事はしていないけれど、そこで一緒にいることや、見ていることが学びになっている状態の参加(見習い)から、次第に見よう見まねでやってみたり(弟子入り)する。少しできることを手伝ったり(端くれ、序の口参加)、そして次第にできることや任されることが増えて(序二段)くる」。Kaye(1982)<sup>[12]</sup>も、自身の理論にふさわしい一つのメタファーとして「見習い」を用いた。見習いが手仕事を学ぶのは、親方が簡単な作業を選ん

で練習する機会を与え、見習いの腕が上がるのを見守り、徐々に難しい作業を与えていくとし、このような基本的な親の役割は、多くの領域で、あらゆる年齢で見られるとする。RDIでは、このようなやりとりの重要性をASDの親と確認し、子どもに教えるのではなく、誘い込むことを試みていく。ASDの場合、他者に関心が向きにくく、働きかけが強すぎると恐怖を感じてしまいかねないので、親がしていることに注意を向ける、興味をもって見る、そしておもしろがるように誘い込むことが求められる。具体的に子どもが関心を向けやすくするために、まず親が日常生活の小さな活動をおもしろがっている姿を見せ、いろんな感情を表出するモデルになることが必要となる。また、子どもと動きを合わせてみたりずらしたりしながら、動く感じや感情を共有することを試みることになる。一つのゴールに向かって協力して取り組むというよりも、そのような協働作業の基礎となるプロセス、共同注意 (Joint attention)、共同調整 (Co-regulation) や情動調整 (Emotion regulation) を日常生活で繰り返し、自己や他者への気づきを促す。大藪 (2019) <sup>[13]</sup> は、乳児期の共同注意について述べる中で、豊かな情動と情動共有は自分の情動に気づき、自己感を生み出すとともに、他者の情動表現に気づくことで相手に他者感を見出していくとする。このようなやりとりが親子の情緒的関係の築き直しになり、少しずつ小さな活動に参加して経験を共有することで「人との関係から学ぶ」機会が増えていくと考える。

高橋(2019) <sup>[14]</sup> は、約2年間RDIに取り組んだASD児(6歳)とその両親を対象に、開始時と1年後、2年後における親子の相互行為の変容を共同注意、相互調整、間主観性の点からやりとりの映像を分析した。具体的には、3人の評定者による評定、母親の映像の振り返りとそれに対するコンサルタントのコメントの3つの側面から親子の関係性の変容を捉え、RDIの効果を検討した。その結果、RDIによって親子のコミュニケーションが促されたことが明らかとなったが、親子の相互行為の変化には、それぞれのどのような行動が影響を与えたのか、より詳細な映像分析の必要性が示唆された。そこで今回は、RDIに取り組んだ親子の相互行為の変化に影響する親子の行動特徴を明らかにすること、そして親子関係につながる支援について検討することを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1. 研究協力者 (事例となる親子) の概要

今回、研究の対象となったのは、初回面接時6歳のA君(小学校1年生、特別支援学級在籍)とその母親である。A君は2歳前に広汎性発達障害と診断されたが、6歳時の新版K式発達検査の結果は、発達年齢が3歳7か月で知的発達の遅れが認められた。初回面接時に母親が話したことは以下の通りであった。「自閉症の息子への関わり方について助言が欲しい。Aには知的な遅れがあり、他の人が言うことの意味が難しく、オウム返しになることが多いが、母親のいうことは理解できることもある。いろいろ調べてみてRDIに興味を持ったので取り組んでみたい。」このように、養育支援としてのRDIの特徴も理解しており、父親も途中から参加して、積極的にとりくんだ。今回、分析の対象としたのは、母親と子どもの相互行為である。

### 2.2. 倫理的配慮

事例の公表にあたり、対象となった家族の許諾を得た。また、プライバシー保護のため、表現上の配慮を行った。

### 2.3. RDIの進め方と方針

RDIでは、開始にあたって、親子の相互行為に関するアセスメント (Relationship Development Assessment: RDA, 以下RDA) を行う。その結果を踏まえて、養育者と援助者 (筆者・コンサルタント、以下Co) との間で共有されたことを元に、養育者のかかわり方について課題を抽出する。その後、課題として家で行う日常的なこと、タオルをたたんだり料理をしたり、また宿題やトランプ、ボードゲームなどの遊びを通した親子のやりとりを撮影、それを養育者の判断で数分間に編集したものについて面接で話し合う。具体的には「最初に想定したやりとりの枠組み (ねらい)」「やりとりしているときの感じ」「やりとりの後、映像を見て気づいたこと」などである。これらを踏まえて、適宜、Coがデモンストレーションを行った。面接はプレイルームで行い、Coが両親と話しているときに、もう一人のスタッフがA君と遊んだ。このような形態で月に1回程度の面接を約2年半行った。面接と面接の間に家庭でのやりとりの映像が85場面、メールで添付する形で提出された。その

都度、Coはコメントを返し、家で試みる母親の不安を軽減することに努めた。

初回面接での母親との話から、母親がA君の療育、教育に対して積極的であり、A君も母親を頼りにして、確認を求めたりする様子は頻繁に見られた。その一方、母親はA君に対して口頭指示が多くなりがちであること、A君もすぐ「ママ」と呼んでしまうなど、母親に依存的になりがちなることを振り返った。どちらかという先に述べたようなRDIが重視するGPRが十分ではないままに言葉を介したやりとりが多くなっていったことが推測された。

そこで1年目は、A君とやりとりする時には非言語的コミュニケーションを取り入れること、さらにA君が戸惑うかもしれないが、すぐに適切なふるまいができなくても、A君自身が感じたり考えたりする機会を確保するために、ある程度の見通しをもって“待つ”ことを提案した。基本的に母親も無理なく、A君との楽しい時間にすることを意識してほしいと伝えた。具体的には、A君の行動を修正しようとして名前を呼ぶ、間違いを指摘するなどの声かけをやめてみる。そして働きかけのペースを落として声や表情、しぐさ、身体などを言葉の代わりに活用することで、A君もすぐに母親を呼ぶだけでなく、母親を参照したり困ったことを表現したりするような、自発的な行為の幅が広がることをねらった。

2年目は、母親がA君の名前を頻繁に呼ぶことや指示的なかかわりが減ったことに伴い、A君も母親を呼んだり不安定になったりすることが減り、次第にやりとりしやすくなったことが報告されたが、A君の様子だけでなく、親自身のかかわり方、その質が話題となった。具体的には、なかなか非言語的コミュニケーションが活用できず、情動共有が難しいということである。A君は確認のために母親を見る機会が多かったが、そのようなとき、母親には良いか悪いかを評価するのではなく、感じたことを口にしたり表情を豊かにしたりするなど、共有の相手となることを母親に提案した。

以上のようなことが、A君の自己意識や他者である母親の気持ちや感情の推測を促し、教える・教えられるという関係（結果を評価する人とされる人との関係）を固定させずに、導く・導かれる関係（見習いから弟子入りして、参照しながら徐々に活動の一端を担い、そのプロセスを共有する関係）

になるのではないかと考えた。

#### 2.4. 分析の対象

分析の対象は開始時、約1年後、約2年後に行った3回分のRDAの映像の3回分である。RDAで行った相互行為の活動は太鼓、パズル、写真を見る、の3つで、A君と母親にはCoが「一緒にやってね」という声かけを行って、10分弱撮影、録画を行った映像の冒頭6分程度の9場面である。

#### 2.5. 分析1：RDAにおける親子の相互行為

RDAとして撮影された映像について、Larkinら(2010)<sup>[15]</sup>の3つのスケール(①共同注意、②相互作用に関する調整、③間主観性の状態)を用いた。各スケールに4つのレベルを設定(表1)、それぞれのレベルについて、どの程度起こっているように見えるか、表2のようにコーディングを行った。親子の関わり(3つのスケール)について、各スケールのレベルごとの重みづけにコーディングされた値をかけたものを合計、それを評定者数(RDI認定コンサルタント3名)で割って平均を算出した。

#### 2.6. 分析2：RDAにおける親子の行動分析

分析1で用いた映像を対象として、母親とA君の行動について行動コーディングシステム(DKH社製)を用いて分類を行った。コーディングに用いた行動カテゴリーの設定経緯は次の通りである。報告者が所属する相談機関において、以前、RDIに取り組んだ複数の保護者とそれぞれの親子の映像(動画資料)を繰り返し再生し、親子の行動について独立でカウントし、不一致については行動の定義について協議を行った。それらの結果を基に臨床心理士2名が観察項目(行動カテゴリー)の選定を行った。その結果、親子それぞれ16の小カテゴリーができ、それらは視線、非言語、言語、感情の4つのカテゴリーに分類された(表3)。

### 3. 結果

#### 3.1. RDAにおける親子の相互行為の変化

A君と母親の相互行為のアセスメント結果は、図1の通りである。共同注意、相互作用に関する調整(以下、相互調整)、間主観性の状態(以下、間主観性)のすべてのスケールにおいて開始時と比べて1年後、2年後と変化が見られた。もっと

表1 アセスメントのスケールとレベル、重みづけとその内容 (Larkinらが作成したものを簡略化)

スケール	レベル	重みづけ	内容
共同注意	注意を向ける様子がみられない	-2	子どもは他者にも対象(物)、出来事にも注意を向けない
	単独・単一の注意・関わり	-1	子どもは、物だけに注意を向けて関わっている
	サポートされた共同注意	1	親子は、同じ物(対象)に注意を向けて関わっているが、子どもは親の関与にあまり目が向かない
	連動・統合された共同注意	2	親子は、同じ物(対象)、また互い(相手)に注意を向けて関わっている
相互調整	偶発的な調整・一致がみられない	-2	共同の取り組みがうまくいかず、バラバラな(協調や調整がない)経験をしている
	偶発的な調整・一致	-1	関わりはあるが、バリエーションが限られている
	工夫はあるがバランスの悪い偶発的な調整・一致	1	偶発的な調整や工夫がみられるが、一方だけが調整や工夫を行っている
	バランスのとれた偶然性への調整と工夫	2	互いに思いやり、敏感な応答性が見られ、共通のゴールに向かって協力するようなバリエーションがある
間主観性	交流はみられない	-2	二人の間に交流がない、相互作用のパターンのない身体接触のみ
	行為の協調・一致・調整がある	-1	道具的コミュニケーション、互いに断片的なやりとりでつながりが弱い
	意図の強調・一致・調整がある	1	互いの相手の行動を予測、共通のゴールに向かって動く
	経験の協調・一致・調整がある	2	感情・情緒的な関わりが見られ、相手の反応に関心を示す、意見や記憶を共有、象徴的なやり方で物を扱う

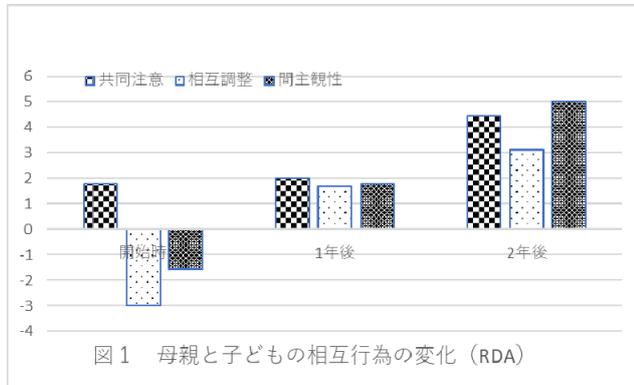
表2 3つのスケールの4レベルに対するコーディング

頻度	コーディング	参考
普通に起こっている	3	定型発達児と保護者のようなやりとりが行われている
しばしば起こっている	2	6,7回(Usualまではいかないが、よく起こっているという印象がある)
ときどき起こっている	1	2,3回(Oftenほどではなく、たまに見られるくらいの印象がある)
少しもない	0	0回(起こる様子がみられない、感じられない)

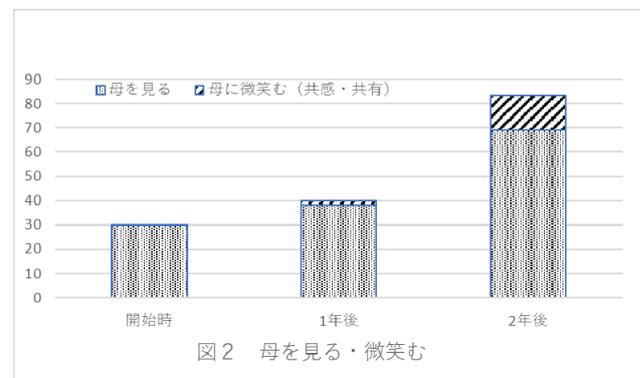
表3 行動カテゴリーと行為内容

カテゴリー	誰が	行為内容	カテゴリー	誰が	行為内容			
1	視線	子	3	感情	18 驚く			
					19 笑う			
		母			20 不機嫌になる			
					21 驚く			
	22 笑う							
	2	非言語			子	4	言語	23 不機嫌になる
								24 質問する(これ何?)
25 事実確認(〜でしょ)								
26 指導・指摘(こうだよ・違うよ)								
27 提案・同意(どう? そうだね)								
母			28 質問する(これ何?)					
			29 事実確認(〜でしょ)					
		30 指導・指摘(こうだよ・違うよ)						
非言語		母	31 提案・同意(どう? そうだね)					
			32 つぶやく(仮定を含む)					
	16 首を傾げる							
		17 首を横にふる						

も大きな変化がみられたのは間主観性で、相互調整、共同注意がそれに続いた。共同注意についてみると、当初（開始時）と1年後の値の違いは大きくないが、相互調整や、間主観性の状態の変化が大きかった。



t-test) を行ったところ、有意差は認められなかった。また、A君の行動カテゴリー「母を見る」と「母に微笑む」を合わせた視線カテゴリーグループについても増加が見られた（図2）。



### 3.2. RDAにおける親子の行動分析

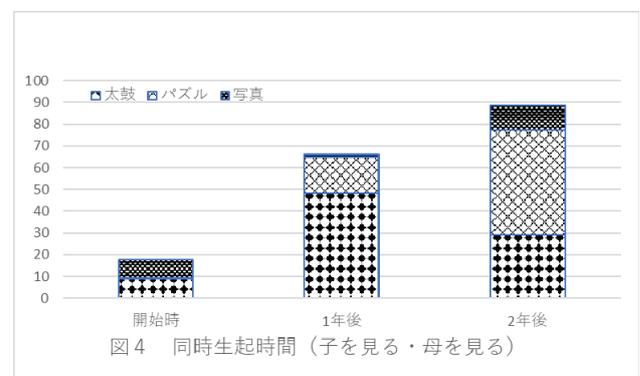
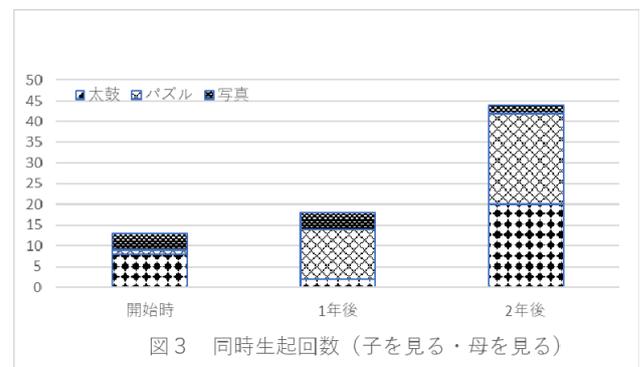
#### (1) 母とA君の行動の変化

母とA君のそれぞれ16の行動カテゴリー、計32のカテゴリーについて開始時と1年後、2年後の3時点における3つの活動についてコーディングを行い、生起数を算出した。3時点における生起数の平均を分散分析で比較したところ、母の行動カテゴリーでは「注意を惹く・促す」( $F(2,2)=35.86, p<.01$ )、A君の行動カテゴリーでは「提案・同意する」( $F(2,2)=27.13, p<.01$ )に有意差が見られ、それらの行動が増加した。「ボンフェローニの方法」(Bonferroni t-test) を使用してどの時点に差があるのか確認したところ、「注意を惹く・促す」では1年後と2年後 ( $t=10.24, df=2, p<.05$ ) に、A君の行動カテゴリーの「提案・同意する」で、1年後と2年後 ( $t=7.69, df=2, p<.05$ ) に有意差が見られた。一方、母親の「指摘する(修正する)」については、1年後、2年後と減少し、分散分析では有意傾向が認められた ( $F(2,2)=5.02, p<.1$ )。

母親の行動カテゴリーのうち、非言語的な関わりである「注意を惹く・促す」と「頷く」を合わせて非言語カテゴリーグループ、「子を見る」「子に微笑む」を合わせて視線カテゴリーグループとして、それらの生起数を集計すると、1年後、2年後と増加がみられた。3時点の生起数の平均を分散分析で比較すると、前者 ( $F(2,2)=14.39, p<.05$ )、後者 ( $F(2,2)=19.23, p<.01$ ) のいずれも有意に増加したが、「ボンフェローニの方法」(Bonferroni

(2) 母親とA君の行動の同時生起と行動のつながり(事象連鎖)

ここではまず、3つの活動におけるA君の「母親を見る」と母親の「子どもを見る」の行動カテゴリーの同時生起性に着目し、その頻度と時間を算出した。その結果は図3、図4の通りで同時生起頻度、及び時間ともに増加した。



次に、行動のつながり（事象連鎖）として、母親の「子どもを見る」の後に母親の「指摘する」、「提案・同意する」が続く頻度、母親とA君それぞれの「対象を見る」と「対象を操作する」の後に互いを見る頻度、また母親の「指摘する」「提案・同意する」の後にA君が「母を見る」の行動カテゴリーが生起する頻度を算出した。それを見ると、母親の「指摘する」が減り、「提案・同意する」が増え、A君の「母を見る」行動は、母親の「指摘する」よりも「提案・同意する」に続くことが多かった。また、親子それぞれが操作対象を見たり、操作したりしたあとに相手を見るという行動のつながりも取り組みが進むにつれ、増加した。3時点において明らかに違いが見られたのは、母親の「提案・同意」の後にA君の「提案・同意」が続く頻度、同様にA君の「提案・同意」の後に

母親の「提案・同意」が続く頻度であった（ $F(2,2)=17.09, p<.05$ ,  $F(2,2)=25.42, p<.01$ ）。「ボンフェローニの方法」(Bonferroni t-test) を使用してどの時点に差があるのか確認したところ、A君の行動に母親が続く「提案・同意」が1年後と比べて2年後が有意に多かった（ $t=7.86, df=2, p<.05$ ）。

今回、32の行動カテゴリーを設定したが、それらがどのように生起するか、同時生起と行動のつながりについて、タイムチャートを比較した。図5から図7は、パズルの活動（5分30秒）であるが、3時点で比較すると1年後、2年後と生起する行動カテゴリーの種類が増え、かつ小刻みに交互に生起していることがわかった。他の2つ活動のタイムチャートについても同様の結果が得られた。

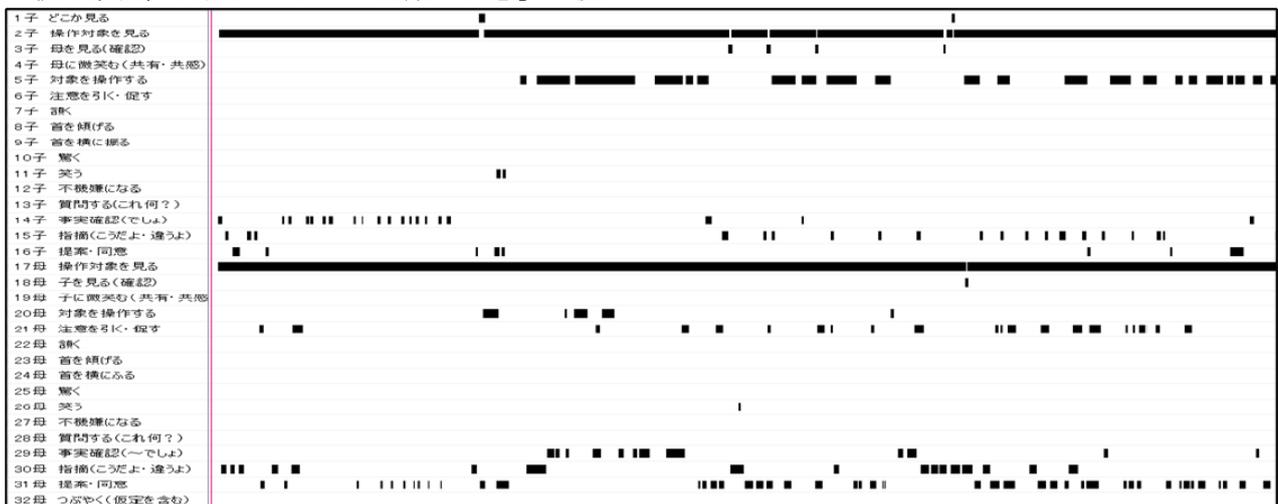


図5 開始時のパズルのタイムチャート

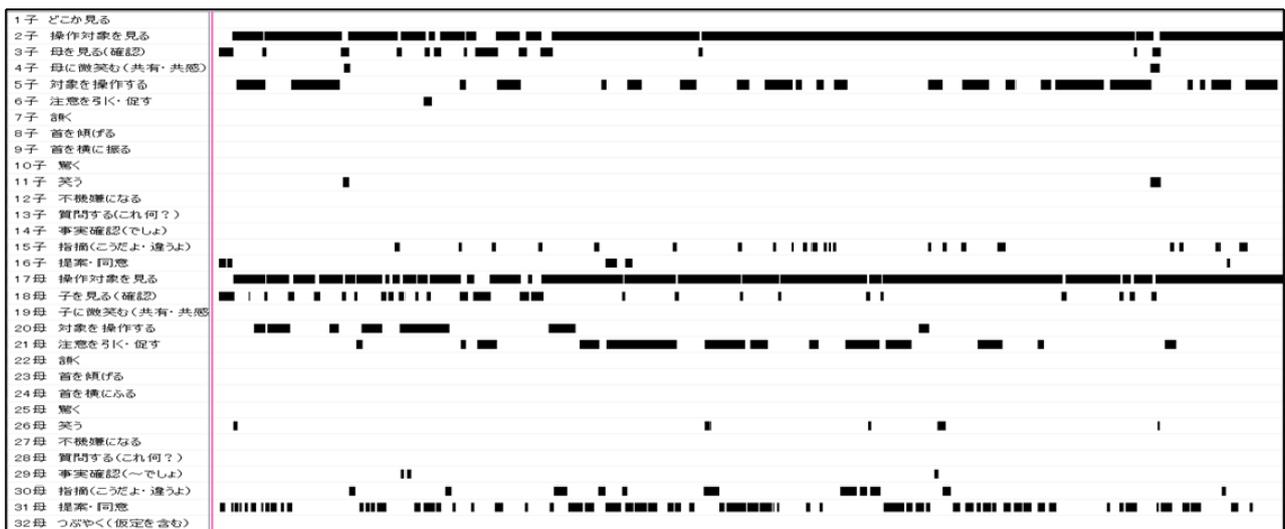


図6 1年後のパズルのタイムチャート

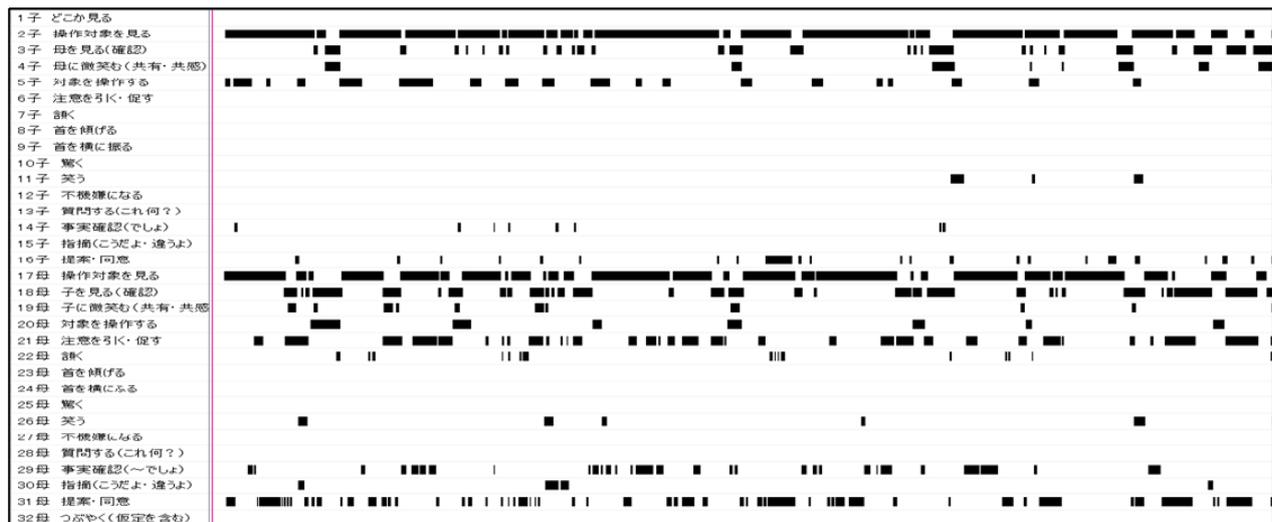


図7 2年後のパズルのタイムチャート

## 4. 考察

### 4.1. 関係性の変容に影響する親子の行動特徴

結果 3.1.で示されたように、本研究では、親子の相互行為の変化を「共同注意」「相互調整」「間主観性」から捉えたが、その関係性の変容について、結果 3.2.の行動分析と突き合わせてみると、母親の行動、特に非言語的な関わりが影響していることが考えられた。また、結果 3.3.の行動の同時生起やつながり（事象連鎖）に照らし合わせてみると母親とA君の「提案・同意」が互いの「提案・同意」のきっかけになることが推測され、視線が合ったり母親の言葉がけの変化に伴って子どもが母親を見たりする頻度が増えるなど、二人の行動の変化は相互に関連し、関係性の変容に影響したといえる。ただし、行動分析において明らかに差が出たカテゴリーは少なく、関係性の変容について親子の言動の量的側面から捉えることには限界があることが推測された。

共同注意について大藪（2019）<sup>[13]</sup>は5つの発達階層（前共同注意、対面的共同注意、支持的共同注意、意図的共同注意、シンボル共同注意）を想定した。この発達階層にA君の様子を照らし合わせると、最初の前共同注意に続く対面的共同注意が安定していないことが推測された。この階層は、生後2か月を過ぎた乳児と母親の関係世界であり、「二項関係」が優勢な時期とされる。この時期、情動が共有されるという特徴があり、母親との二項的な情動交流に第三項として「音声」「身体」「物」が組み込まれるようになると、自己と他

者への気づきが促され、支持的共同注意が現れてくるとする。そして定型発達児の場合、母親からの働きかけを受けて物を共有しながら遊ぶとき、母親に視線を向けることは少ないが、関係は遮断されてはならず、母親の動作や心の動きに気づきながらそこにいるという。しかしASD児の場合、母親との二項的な情動交流が起こりにくく、「音声」や「身体」が第三項となりにくいことが考えられる。「物」を介在した方が関わりやすいかもしれないが、それは自己と他者の感覚を豊かにするというよりも、子どもと「物」の関係だけを強くし、他者との情動交流に広がらない可能性が高い。A君の場合も、操作する対象である物を介して、母親とやりとりすることがうまくいかず、結果的に母親の指示的な働きかけが多くなりがちであった。しかし、母親がA君のふるまいや表情を見ながら声の調子やしぐさなどの非言語的な関わりを試みたこと、換言すれば情動調律的な行動が増えたことがやりとりのペースを落とし、互いに視線を向ける機会が増え、結果的に関係性の変容につながったことが推測された。

### 4.2. 子どもの社会性の育ちを支える親子関係と養育支援

関係論的発達論では、人の「発達」を個人の（頭の中）認知構造の変化という見方をせず、子どもが生きている社会、世界、共同体、そこでの人々の営み、活動などの「関係」のありようの総体の変容として捉える（佐伯，2014）<sup>[16]</sup>。本研究にお

いても、4.1.で示したように、社会性を子どもの個体能力として捉えないで相互行為に着目することによって、関係性の変容やありようが検討できること、そして結果で示した行動カテゴリー生起数や同時生起性、行動のつながり（事象連鎖）の変化は、社会性の基礎となる、親子の間の情緒的応答性（Hobson,1989）<sup>[17]</sup>に影響することが明らかとなった。Treversen（1998）<sup>[1]</sup>は、ASD児について生活の中での出来事のうち、自分にとって大切な思い出や対人的経験の自覚をもてて、それについてコミュニケーションがとれるように励まされることが大切としたが、今回、A君は母親との非言語的な関わりによって励まされ、親子間の情緒的応答性が安定したことが推測された。このような非言語的コミュニケーションの増加は、社会的参照や経験の共有の機会を増やすだけでなく、日常生活における導く・導かれる関係につながることを示唆される。

しかしながら、映像を通して言語的な関わり、また非言語的な関わりとの関連については十分に検討できなかった。母親の言語的関わりについてみると指摘や修正が減り、提案や同意が増え、カテゴリーに分類することで変容の特徴を捉えることはできたが、それらが Rogoff（2003）<sup>[6]</sup>のいう「意味の橋渡し」になっているか、言葉で伝えあい調整しあう過程となっていたか、それらについては、多くの行動カテゴリーを設定したことで文脈が見えにくくなってしまった可能性が考えられた。Kaye（1982）<sup>[12]</sup>は、母子の関係（母子システム）について、単に子どもの反応と親の反応を加算しただけでは適切に表すことはできない、一つの現実のシステムは、部分の総和以上のものであるとする。今回、RDIへの取り組みを通して非言語的コミュニケーションの重要性は示唆されたが、幼児期から学齢期にあるASD児と養育者の言葉による交流との関連をどう捉え、また非言語的、言語的コミュニケーションの両者をどう支えるかについては新たな課題となる。

定型発達の乳児と母親の場合、言葉による交流は、シンボル共同注意以前の、前共同注意から意図的共同注意までが十分に行われた結果として起こってくるが（大藪, 2004）<sup>[18]</sup>、ASD児の場合、加齢に伴って言葉以前の相互交流が十分でないままに言葉が使われている可能性がある。基本的に乳児期における母親語の語りかけは、子どもの「こ

うしたい」「こうしてほしい」などの思いを間主観的につかんで受け止めながらも応答を繰り返す中で、そこで生じた情動が基になって行われる。しかしながら、ASD児の母親の場合、そのようなプロセスに慣れておらず、情動交流の経験が十分にされないまま、子どもの生活年齢に合わせた言葉がけが多くなるなど、言語的な関わりが先行しがちになることが懸念される。言葉による交流が「意味の橋渡し」となるには、それ以前のやりとりを積み重ねることが重要で、鯨岡（2015）<sup>[19]</sup>が言う、母親の間身体的、間主観的な情動把握とその後の対応を支えること、例えば、感じたことに心に浮かんだことを口にする、もしくはそれを表情やしぐさ等で表現してみるなど、子どもとの関わり（非言語的コミュニケーション）を豊かにしながら言語的コミュニケーションを支える必要がある。

大藪（2019）<sup>[10]</sup>はトラウマを受けた乳幼児の心理療法と共同注意の関連に触れ、「子育て環境」として働く共同注意は、親と子の間だけでなく、親とそれを取り巻く人との共同注意や親が心の中で表象する人との共同注意が重要な役割を演じていると指摘した。この視点は、ASD児と親との間の情緒的関係の築き直しにも当てはまり、援助者と養育者との関係のあり方は、親子の関係性に影響することが考えられる。今回、A君の母親には、日常生活場面で撮影された映像に、A君のことでなく、自分のやった感じについてもコメントを入れてもらい、Coも映像を見て思ったことや感じたことを抽象化せずになるべくそのままコメントとして返すようにした。親や教師によるASD児とのやりとりのビデオによる見直しは、子どもの行動の洞察と自身の行動の適切さや有効性を高めるのを助けるとされるが（Treversen, 1997）<sup>[1]</sup>、見直したことをCoや養育者間で共有する、また映像を元に、子どもだけに限らず自分自身との向き合い方や見方について率直にやりとりする（対話する）関係になることは、Coと母親も教える・教えられる関係ではなく、導く・導かれる関係につながると思われる。そのあり方については、今後の課題としたい。

## 謝辞

今回、研究協力を快諾していただいたご家族に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- [1] Treverthen, C., Aitken, K., Papoudi, D. & Robarts, J. (1997). *Children with Autism, Diagnosis and Intervention to Meet Their needs*. 中野 成・伊藤良子・近藤清美監訳(2006)自閉症の子どもたち-間主観性の発達心理学からのアプローチ. ミネルヴァ書房.
- [2] 滝川一廣 (2017) 子どものための精神医学, 医学書院, 245-270.
- [3] 黒川新二 (2016) 自閉症とこどもの心の研究, 社会評論社, 146-164.
- [4] Fogel, A. (2008). Relationships that support human development. In A. Fogel, B.J. King, & S. Shanker (Eds.). *Human development in the 21st Century: Visionary policy ideas from systems scientists*, Cambridge University press.
- [5] Rogoff, B. (1990). *Apprenticeship in Thinking: Cognitive Development in Social Context*. New York: Oxford University Press.
- [6] Rogoff, B. (2003). *The Cultural Nature of Human Development in Social Context*. New York. Oxford University Press. 當眞千賀子訳 (2006). 文化的営みとしての発達: 個人, 世代, コミュニティ. 新曜社, 371-432.
- [7] 田嶋誠一 (2009) 現実に介入しつつ心に関わる, 多面的援助アプローチと臨床の知恵, 金剛出版, 98-119.
- [8] 須田 治 (1999) 情緒がつむぐ発達, 新曜社, 197-235.
- [9] 氏家達夫 (2012) 発達を支える社会文化的基盤. 日本発達心理学会編, 発達科学ハンドブック 5 社会・文化に生きる人間, ミネルヴァ書房, 10-24.
- [10] Gutstein, S. (2009). *The RDI Book: Forging New Pathways for Autism's and PDD with the Relationship Development Intervention Program*, Connections Center Publishing.
- [11] 鈴木まひろ (2016) 新たな幼児教育観への転換は「子どもに意見を聴く」ことから, 汐見稔幸・久保健太編, 保育のグランドデザインを描く—これからの保育の創造にむけて—, ミネルヴァ書房, 257-269.
- [12] Kaye, K. (1982). *The mental and Social Life of Babies: How Parents Great Persons*. The University of Chicago. 鯨岡俊・鯨岡和子訳(1993), 親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするか, ミネルヴァ書房, 40-155.
- [13] 大藪 泰 (2019) 共同注意という子育て環境, 総合人文科学研究センター研究誌「WASEDA RILAS JOURNAL」, No.7, 85-103.
- [14] 高橋ゆう子 (2019) 自閉症スペクトラム児と保護者の関係発達—対人関係発達指導法 (RDI) による事例検討—, 人間生活文化研究, No.29, 581-590.
- [15] Larkin, F., (2010). The relationship Development Assessment- Research version: Preliminary validation of a clinical tool and coding schemes to measure parent-child interaction in autism. *Clinical Child Psychology*, 20(10), 1-22.
- [16] 佐伯 胖 (2014) 幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために [増募改訂版], 東京大学出版会, 92-158.
- [17] Hobson, P. (1989). 認知を超えて—自閉症の理論, 野村東助訳, In Dawson, G. *Autism: nature, Diagnosis, and Treatment*. New York: The Gilford Press. 野村東助・清水康夫監訳(1994) 自閉症—その本態, 診断および治療. 日本文化科学社, 21-48.
- [18] 大藪 泰 (2004) 共同注意—新生児から 2 歳 6 か月までの発達過程—, 川島書店, 東京.
- [19] 鯨岡 峻 (2015) 「接面」からみた人間諸科学, 小林隆児・西研編, 人間科学におけるエヴィデンスとは何か: 現象学と実践をつなぐ, 新曜社, 187-228.

## 付記

本研究は、科研基盤 (C) 19K02920 の助成を受けました。

---

**Abstract**

---

The purpose of this paper was to clarify the behavioral features of a mother and her son who has Autistic Spectrum Disorder (ASD) through RDI. The child was a 6-year-old boy who attends a special needs class in elementary school. The mother and her son have continued to do RDI for the last two years.

Mother-child dyad activities were videotaped three times as Relationship Development Assessment (RDA). Three aspects of relatedness (Larkin, et al, 2010): 1) attention engagement, 2) interactive regulation, 3) interactive engagement, were assessed. The behavior of the mother and her son in those video clips were coded with 32 categories by the behavioral coding system. The results are as follows: firstly, three aspects of relatedness between the mother and the child have changed three times in RDA. Secondly, non-verbal behavior in both mother and son has increased. Thirdly, the calculation of co-occurrence and sequences of their behavior could be useful in examining the modification process of their interaction. Therefore, it was suggested that RDI has influenced the relatedness between the mother and the child. Furthermore, the author discussed the importance of rebuilding good relatedness and indicated the difficulty of comprehending relatedness through behavioral analysis.

---

(受付日：2021年11月1日，受理日：2022年2月24日)

**高橋 ゆう子 (たかはし ゆうこ)**

現職：大妻女子大学家政学部児童学科教授

筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了。

専門は、臨床心理学，特別支援教育。現在は、発達障がい児と家族の関係発達支援，及び関係者とのチーム支援に関する研究を行っている。